

経済学と聖書(8)

2020年6月26日(金)

関西学院大学経済学部

春学期チャペル

担当：井口 泰

- 1 主よ、来たり、祝したまえ。
主を信じ、共に歩む、
われらみな、主のものなり、
笑うときも、泣くときも。
- 2 主のめぐみ分かち合えば、
そのめぐみ豊かに満つ。
悩みにも苦しみにも、
打ち勝つ信仰与えませ。
- 3 地に平和われら望まん、
主の平和いまたならず。
なみだもて種まくもの
ときいたらばむくいられん。
- 4 主よ、来たり、祝したまえ。
いまわれらいでゆくとき。
われらみな、主のものなり、
とこしえまで主に仕えん。

1 **Komm, Herr, segne uns, dass wir uns nicht trennen, sondern überall uns zu dir bekennen. Nie sind wir allein, stets sind wir die Deinen. Lachen oder Weinen wird gesegnet sein.**

2 **Keiner kann allein Segen sich bewahren. Weil du reichlich gibst, müssen wir nicht sparen. Segen kann gedeihn, wo wir alles teilen, schlimmen Schaden heilen, lieben und verzeihn.**

3 **Frieden gabst du schon, Frieden muss noch werden, wie du ihn versprichst uns zum Wohl auf Erden. Hilf, dass wir ihn tun, wo wir ihn erspähen – die mit Tränen säen, werden in ihm ruhn.**

4 **Komm, Herr, segne uns, dass wir uns nicht trennen, sondern überall uns zu dir bekennen. Nie sind wir allein, stets sind wir die Deinen. Lachen oder Weinen wird gesegnet sein.**

詩篇22:1～8 「経済における信頼と希望」 「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか。私を救わず、遠く離れておられるのですか。」

詩編23は「主は私の羊飼ひ。…主は私を緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われます。」で始まるダビデによる「讃歌」なのに対し、詩篇22は、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」で始まり、ダビデの苦難の叫びで満ちています。この詩篇は、イザヤ書53章やダニエル書と並び、イエス様を預言する旧約聖書の語りとされてきました。

マタイによる福音書27章には、イエス様が、十字架で息を引き取られる前に、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれたことが記されています。人々が、イエスがエリアを呼んでいると考えたとすれば、イエス様は、当時の国際語であったアラム語でなく、ヘブライ語で叫んだ可能性が高いと思います（ルカによる福音書は、イエス様の言葉をアラム語で表記しました）。

この推論が正しければ、詩篇22は、マタイによる福音書のイエス様の十字架上のことばと一致します。大事なことは、イエス様の十字架のうえで想像を絶する苦難の中にありながら、神様を信頼していたことです（あなたは、どう理解しましたか）。

私たちは、人を信じることができない「神なき世界」に生きています。人間は、いつでも過ちを犯します。それでも、あなたが人を信じるとすればどうしてですか。人間は、他人を裏切ることもあります。政治家も政府も、言葉のうえでたくさん約束しますが、あまり守りません。企業も、そうです。特に、世界経済危機後、経営者の背任や企業犯罪は、ビジネス・スクールの最重要テーマの一つになりました。

日本の大学の経済・経営学部で、「企業倫理」が教科に登場しないこと自体、永久の経済成長を信じ、お金儲けを最大の価値とする経済人の精神的墮落を象徴しているのではないでしょうか。

近年の先進国及び新興国における国内経済格差の拡大を、先週のチャペルでは、健康との関係で考えていただいたのを、覚えていますか。国内経済格差の拡大が、人々の健康格差と深い関係にあることは、実証的にも明らかになってきました。パンデミックの最中にある私たちが直面している問題なのです。

実に、経済・社会における格差の拡大がもたらす最大の害悪は、人々の信頼を失わせることであるという学説が、社会学者・文化人類学者の手によって、データで立証されるようになりました。近年、経済学者は、心理学をとりこんで行動経済学をブームにしていますが、信頼という変数は、なかなか経済学の対象になりませんでした。国内経済格差の拡大がもたらす深刻な問題に対しても、一部を除いて経済学者の反応は鈍いのです。

そうしたなかで、パンデミック下で欧米で広がる差別反対運動は、1960年代後半の「公民権運動」の動きを上回る規模です。感染症の蔓延がとまらないアメリカでは、差別の対象は、アフリカ系やヒスパニックの市民にとどまりません。日系や中国系を含むアジア系市民に対してまで「国へ帰れ」というヘイトスピーチ(又はヘイト・クライム)が起きています。

信頼の喪失は将来への希望を失わせ、社会(世界)の問題を解決するための起業(スタート・アップ)やベンチャー投資が急速に縮小しています。皆さんは、起業は「一獲千金」のための行動だと思いかもしれません。しかし、巨大な利益で巨額の資産を築く(例えば「ユニコーン」)ベンチャーは、全体の1~2%程度にも達しません。その多くは、地域のコミュニティ・ビジネスであったり、途上国での開発支援なのです。

こうしてみると、経済においても、「信頼」と「希望」は、世界をささえる重要な要因です。経済学の教科書には、個人の効用最大化や企業の利潤最大化が、当然の行動のように語られて、経済学者が自分の業績にしか関心がなく、極端な功利主義者になってしまうと、経済学部生まで影響を受けてしまうでしょう。

私たちは、6月下旬の現在も、パンデミック(世界的な感染症拡大)を脱出していません。感染を防止するための都市封鎖や移動制限は、今年の第二四半期の世界経済を10%前後も縮小させ、貧困層を増加させ、経済や健康の格差を、さらに拡大させています。

こうした危機が3か月を超えて続くと、経済問題以上に、人々の心理的又は精神的な影響又はダメージが大きく、社会問題として顕在化してくることが危惧されているのです。

ワクチンや特効薬のない状況が続く以上、経済の再稼働への動きが、第二次又は第三次の感染拡大を招くことも必至です。経済の「V字型回復」を期待して、株価が高まっているのですが、「L字型」の時期が続くことも、覚悟しなければなりません。

プロテスタントイイズムは「新教」と呼ばれますが、本来は、イエス様の使徒や初代教会への「原点回帰」なのです。制度化され教義が確立されて、生き生きとした「塩気」を失い、多くの人々がキリスト教会を去りました。初代教会の信徒たちの「神様、来てください」という祈りは、絶望的な状況で神様への信頼と新たな世界への希望を失わなかったイエス様の叫びと同じです。

ですから、私たちは、自分の不幸や苦痛にとらわれて希望を失わず、周囲の人々に信頼と勇気を生み出す役割を担っているのです。身近な人たちの弱さを共に担って、日々できることに真剣に取り組みましょう。そこに神様が来て働いてくださるはずです。